

教化体験の交流と実践を

—第十二回中央教化研究会議参加者の感想—

第一分科会

△寺檀問題と教化活動▽

第一分科会の助言者として、その責を務めさせていたゞきましたので、こゝにそのまとめをさせていたゞきます。

1、現在の宗門の実態を見ると、単位寺院にあっては住職自らが、檀信徒の各家庭の内情を良く知る事と同時に、教化に当っては、祖意伝達の具体的方法と創意工夫をこらした上に立って、寺檀の意志疎通をはかることが必要である。

2、今日的に派生する諸問題について、常に研讀を積み重ね、私見にとらわれず、何事も宗祖に聞き、宗祖

にお答の出来る住職の姿こそ、檀信徒から信頼を寄せられる住職であり、寺である。

3、常に寺族が一丸となって努力をして、檀信徒は勿論、地域社会の人々より、視線のむけられる寺院にすることである、その為には、寺の環境、莊嚴には、つとめて気を配り、常に清楚であることにとめること。4、寺院開放と言うことは、公民館でもなく集會場でもない。どこまでも一天四海、皆歸妙法の祖意にもとずき、つねに教化活動の一環とされるべきである。その要素の上に立っての寺院開放を考えるべきである。5、住職としては、努めて地域社会に貢献し、対外活動をすることである、その姿こそ接触をする人をして

共感を呼び、住職と言う人間像を通して、本宗への縁を結ぶことになる、それには寺族が模範的な行動をすることである。

以上私なりに整理をさせて頂きました、皆様のよりよい御理解と御教導をお願い致しまして、まとめさせていただきます。

愛知 尾張 太田 鳳苑

私は、中央教研運営委員として、又第一分科会の発題者として参加しましたので、意図的な成果を夢見ていた事はいなめません。だが、さすが、身延結集と云うので、参加者一同の意欲的な取組みと、熱心な発言と全ての行動には頭がさがりました。

私の分科会の内容の上から一言感想を述べますと、現在社会が要求している問題と、我々宗徒が見ている現代社会の様相に対してのこたえ方とが大分ズレている様に思えます。その理由は、寺檀関係の問題点や、現代社会に対する教化方法（勿論檀信徒を含み）が、旧来のマンネリからの離脱困難の爲め、現代に於ける立正安国論の青写真は程遠く、今後の課題と云う感がありました。

然し、その糸口とも言うべき参加者からの熱心な体験談や意見等が多く出されて有意義だった。

あの日の三百人近い全国教師の黒衣の姿は、実に尊い姿だったが、花火線香ならぬ黒煙のかたまりが、各地区に又分散し消えて了はない様願うものであります。あの日の階級意識や門閥意識を捨て得た清浄な気持が、若し黒衣姿に影響されたとしたら、宗門改善の一つの方向を示しているものと思える。

最後の宣言文は、その方法論ではなからうか。その実践こそ、七百遠忌報恩の道であると私は考えています。

滋賀 北川 即正

第二分科会

△子弟教育と法器養成▽

●第12回中央教研を身延山で開いたことは、それなりに意義があった。雨のため祖廟中心の行事が思うようにはできなかつたが、それでも雨を衡いての唱題行進、三百余人が異口同音に唱える夜の唱題行、さらに閉会式の宣言決議が、宗祖のみ魂の前にお誓いするという心で胸ひきしまり、お互いの決意を厳肅なものにするこ

とができた。

それにしても第二日祖師堂の朝勤において、本山でも三百有余人身延結集の意義を認めて、せめて神力品偈だけでも読誦唱和させてほしかった。導師の回向では一般参詣者並の取扱いをされて、いかにも淋しかった。●分科会討議は参加者が拡大され、はじめての人も多かったので巧くいか案ぜられたが、私の分科会（第二）では全員が殆んど発言し、キレイごとでなく、いつわらぬ現状をそのまま、さらけだして問題が提起され、話合いに熱がこもった。他の分科会でも同じ傾向が見られたときく。ことに若い層の発言は、話合いを新鮮にした。とかく今までの教研がレギュラーメンバーで運営されてきたが、こゝらで方法を転換すべきではないかとおもった。

●地域教研と中央教研のつながりは、重要な課題であるが、こんどの会議でも地域教研を踏まえての討議は見られなかった。地域教研が中央教研の前に又後に開かれた場合、下意上達、上意下達の形がとられるというようなものではない。しかしそこにはテーマについても、地方の独自性を生かしながら、中央との有機的関連は考慮すべきでないか。少くとも中央教研と地域教研の参加者が、同じ人であるということは条件にし

たい。今後具体的な方策を考えるべきである。

岩堀 豊種

第二分科会Ⅱ子弟教育と法器養成・後継者問題Ⅱに出席して第一に感じたことは、出席者四十余名中、大部分は寺院等級に於て、二十等以下の住職であり、中以上の優位寺院の住職は殆んど居られなかったことである。

そして後継者問題、即ち後継者難に喘ぐ寺院は地方辺域末端の二十九等・三十等・等外の貧困寺院にあって殊に深刻であることであり、それに反して都市の優位寺院にあっては、所謂嗣子相続で、寺院の私有化ということが当然視され、中には三代目四代目という処もあり、その嗣子相続に苦慮（子息の無い時は娘の婿を捜し求めるなど）しているところもあることを知った。

これらの点は何を物語るか。感じたことは地方末端寺院にあっては真剣に求法弘教に精進してその寺院を維持存続しようとする努力しているのであり、中以上の優位寺院にあってはその高収入に安座せんとする傾向にあると見られることである。

そして子弟の養成について貧困寺院にあってはその教育費にこと欠く有様であり、反面優位寺院にあっては教育費などはその収入の数パーセントのみであることである。

想えば現代の貨幣経済時代にあつて、往昔の従浅至深の希望なき現状では貧困寺院の子弟はその後継を拒否しがちであり、その無道念をのみ誹るべきではないと思われるのである。かといって優位寺院の嗣子相続に就任し立派に求法弘教している向きもあるのであつて、真に「大教の隆昌はその人にあり」といふべきかと思われたのである。

要するに貧困寺院優位寺院を問わず、有能なる子弟を得ることは、為法為宗、最重要事であつて「従浅至深の道」はこれを閉すことなく門戸開放に努むべきで、宗門の隆昌はまさに此処に在りといふべきであらうとの感を深めた次第である。

清水市 本能寺 中條 暁存

第三分科会

△現代の家族関係と幼児青少年教化▽

第十二回中央教研七百遠忌身延結集大会は全国より三百二十拾余名という多数の参加であり、戦後最大の結集であつたと聞く。教研会議が過去十年の積み重ねの結果が実つたといつてもよいと思うのです。全員が素絹五条にて報恩法要、雨の中の祖廟唱題行等参加者にとり意義深い大会であつたと考えます、私は第三分科会に参加させて頂きました。各地での諸師の活動実態の発表意見交換があり、中々参考になる事柄が多くありました。何時も思うことですが、教研会議は理論の場であるだけでなく、それがストレス解消の場であつたり、自己満足の発表の場であつてはならないと考へるのです。即ち寺院と私共が現実の生活の中で妙法に活動していくべきか、の諸問題を充分とりあげ、討議を展開していく、実践研鑽の場であるべきものと思ふのです。皆さんと意見を斗わせ明日の布教に役立つための会でありたいと希うのです。

当会の開催に当り、運営準備資料作成にお骨折り頂いた各師に深い感謝を申し上げます。

東京東部 鈴木 貫仁

右分科会の討議内容は書記によって詳記されているはずなので略し、その中から、私の問題として意識した若干のことについて、列記しておきます。

- 一、家族制度の崩壊に伴い、寺院仏教の危機がせまっているのではないか。家族集団が核分裂化して、先祖崇拜的な宗教感情が稀薄となりつつあり、青少年、幼児に対する家庭内におけるしつけ指導は野放しである。学校教育、社会教育、家庭教育、いづれにおいても宗教不在。しかも、古い伝統をもつ仏教においてすらも、その教えが、日常の生活指導原理として、家庭の中に入っているかどうか、きわめて疑問である。新興宗教が家族ぐるみであるのと既成仏教と対比して憂えざるを得ない。
- 二、宗門の青少年、幼児に対する教化活動は、「宗門」としての指導性は全く確立されていない。各篤志な住職教師の犠牲的な奉仕と個人プレーによって支えられ、展開されている。宗門の指導原理を明確にするとともに財政的方策も樹立すべきである。
- 三、宗制立の「青少年教化対策委員会」はその存在も明らかでない。その業務状況を報告し、その活動のための人材アップをいそいで作るべきである。
- 四、社会教化は、宗教的な社会教育である。宗門は全

国の本宗関係の、教育、保育等の機関に対して、父母教化の方針、カリキュラム或は教材等を提供し、宗旨を問はぬ一般父母に対する教化伝道の道を開くべきである。

- 五、「日蓮宗社会教化伝道教本」(仮称)を発行し、講習会を持つようになりたい。

三田村龍全

第十二回中央教化研究会議七百遠忌身延山結集大会に参加した。

全国各地から三百人からの僧侶が名誉や地位を離れ、素絹五条にて唱題行進して祖師堂に向う姿はなんとも云われない気持ちだった。頑張ろう。日蓮大聖人教えを現代の人々に伝え教えたい……。

私は第三分科会に出席した。各地で活躍されている人、活躍しながらいろいろな難局にぶつかっている人、また、これから活躍しようと諸師の意見に耳をかたむけている人々、ともに真剣に討議された。この分科会は「現代の家族関係と幼児・青少年教化」のテーマのもとに討議されたのですが、その中で青少年教化の難しさと、その対策の遅れに困惑した。しかし出席者の中

には幼児教育、母親学級、父親学級、障害児対策、または親の命日を子どもに教える命日教育などさまざまなき意見をだされ、どれも地域にもって帰って参考にできるといった。

この大会が日蓮大聖人のおん魂のすむ身延山で行なわれたこと、これに参加できたことに感謝いたします。

通元院住職 水野 隆正

宗祖七百遠忌報恩の教化活動を宗団あげてどう取組むべきか」と云う大きな問題を考える教師結集大会が身延の聖地に於て開催出来たことは誠に意義深いものがあります。

最近の状態は資源問題、人口問題、食糧問題等世界的規模の危機が私たちの日常生活に迫っております。

同時に私たちの身近かな家庭、学校、職場、地域社会の中で、いま程人間としての生き方、人間本来の姿が問われる時はないと思います。こうした中で、特に次代を背負う青少年の育成教化を寺院活動として、どうするか、と云う問題の基本的な考え方、対応の仕方等各寺院が取組んでおられる種々相にふれて討議がなされたが、これが単なる個々の寺院活動であつて、宗団

としては、この点縦横の連携もなく、中堅の指導者(特に僧侶)の統一養成もなされずに居る現状は甚だ遺憾です。この機会に宗門は仏教者としての青少年育成の教化のための組織作りと指導者の養成をいそぎ、宗教教育をもつて、仏教者として世の期待にこたえたいものです。

石井 鍊昭

第四分科会

△日蓮聖人の報恩精神と七百遠忌▽

第十二回中央教研会議七百遠忌報恩教師結集大会に第四分科会宿坊(樋之沢坊)責任者として参加しての感想の一端を述べます。

十月一日準備打合せの運営委員会(武井坊)に出席委員会終つて夕方より宿坊の部屋割その他準備して本部へ居り報告。

十月二日宿坊にて受付、注意事項指示定刻素絹五条着用して宿坊前に集合整列して順次唱題行進にて登山総受付より、棲神閣に昇堂。全国より参集の三百余名の教師の心からなる読経唱題の音声は棲神閣をゆるがすばかりの感激の遠忌御報恩の大法要であつた。続いて

御真骨堂前にての記念撮影終つて短大講堂にて全体会
—基調報告等すませて下山。

各分科会に於いて二日、三日の二日間。熱心なる研
究討議が行なわれる。第四分科会は「日蓮聖人の報恩
精神と七百遠忌」のテーマについて各師より貴重なる
意見討議が行なわれた。

この内容については会議担当の各師より、まとめの
あることと思うので省略する。

十月二日夕食後八時半より九時半の祖廟にての報恩
唱題行は、小雨降る中壞中電燈にて、足元を照しながら
唱題行進にて参り、静寂そのもの。祖廟前にて順次
結集の多数の教師参集しての報恩唱題行は周囲の山々
にもこだまして身のひきしまる思いであった。

翌三日午后一時よりの祖廟に於いて感謝の唱題行と
大会宣言、報告、閉会式で今回大会の幕を閉じたが、
遠忌御報恩の心を深め、広布の決意を新らたにした。

今回の大会に宿坊責任者として、定刻より十五分前
に起床して就寝に至る迄スケジュールにのっとり時
刻正確に点呼、進行、誘導、食事の玄題発声等々勤め
たが各師の協力を得て無事に任務を遂行できたことは、
高祖大士御加護の賜と有難く思う。合掌

東京東部 運営委員 酒井 智圓

第十二回中央教研のハイライトは、なんとといっても
服装の一律化で、僧正も沙弥もなくいかめしい僧階章
もなく素絹五条に身を正しての奉告式と秋雨のなか暗
闇について御廟所で行った唱題行と誓願の赤誠を披歷
した宣言文による閉会式であろう。

わたしの出席した第四分科会は「大聖人の報恩精神
と七百遠忌」のテーマで、既に始められた特派布教の
受け入れ方や遠忌奉行のビジョンや伝道宗門としての
今後のあるべき姿など理論よりは実際問題であっただ
け実に活ばつ適切な意見交換が行われ、遠忌事務局か
ら星課長が同席したこともあつて質問も積極的で、特
に今回の七百遠忌をたゞ吾々門下だけの御報恩会に終
らせることなく、広く日本仏教史上での日蓮聖人の七
百遠忌として広く対外的に呼びかけるべきだとの意見
は傾聴させられた。当局の善処を望みたい。

○報恩の誓願満つや御廟塔

○唱題に誓い明るく秋雨の夜半

奥村隆祥

第五分科会

△日蓮宗の現状と教化活動の組織化▽

武蔵の国千束の郷——即ち東京池上を布教伝道の拠点として、現代宗教研究所の熱気あふる、有力メンバーによって構成し過去十二年の下から盛り上る研修の成果を祖師大聖人の祖廟に誓願すべく報恩のための身延山結集であった!

秋色ようやく織り成果報恩の山処嶺に全国より参集せる各山の教師、素絹、五条に清装せる雄姿こそは誠に外観は実にスバラシかつた、本年度研修所に挺身せる研修生の綿密なる陰の御尽力によって恥をかかぬ本山参拝、秋雨にけむる祖廟参拝を成し得た事はせめてもの思い出として生涯の一ページに留め置き度い。愚僧が提案を得た第五分科会にしても「教化センター」の設置につまづき、「教化本位による伝道教団」づくりをと云うテーマの至眼からはずれ、各ブロックの代表の発言にしても、行動性の無い、責任を持た無い雲をつかむが如き言動は、座長席をゆさぶった事は事実である。もつと勉強して祖廟に結集すべきであると云う感に打たれた。

兵庫県東部 護国寺 相沢 泰淳

教研は回を重ねるに従って充実して来たのは同慶の至りである。然し反面マンネリ化している点も否めない。今後は地方教研を主としテーマを全国共通と地方的なものとの二つに絞り、中央教研はその成果発表の場としたらどうだろうか。第五分科会はバズ方式で行ったが、発言がや、低調であったのは残念である。教化センターについてはその必要性を認め乍らその実施に当って、問題が余りにも大きい事を痛感した。又討議資料が整い過ぎていたのは一考の余地がある。模範解答が予め用意されている感じである。問題点を列記するに止め、むしろ出席者から色々と発言させる様にした方が盛り上るのではないだろうか。最後に場所については分科会々場は山で一括して行い、坊は単に宿泊のみにした方が、会場を統括出来るし、連絡にも何かと便利なのではなかったかと思う。

久古 教保

第六分科会

△現代社会の諸問題と教化▽

空前絶後の大感激のもとに終了した身延結集、第六分科会に於ては、共通して現代社会の諸問題は末法五

濁狂乱の悪世の到来と、とらえ、個人的安心のみを考えてはならぬ、立正安国、諫暁の布教を展開すべきである。宮沢賢治の「世界中が幸福にならねば個人の本当の幸福はありえない」である。

その方策としては法華経の絶対性、人類の平和を求めて帰趨する処の真理真法であることを宣説することにつぎる。いわゆる法華経の教える開会の思想とは、イデオロギーの統一であり、一乗妙法への帰結である。

イデオロギーの対立が国の内外をとわず騒乱の原因であることに思いを致し、立正安国論の「唯我が信ずるのみに非ず、他の誤りを誠しめんのみ」と示された他のあやまりをいましめんには、宗義大綱にもある如く我々の教は五重相對等の教判によつて詮顯されたもの、とあるが五重相對の第一内外相對に於て宗門教師はそれが出来るやが、大問題である。現代の内外相對とは政治的低次元のイデオロギーは勿論、世界の思想哲学に對決することである。こゝに我々教師は大いなる覚悟を以て宗祖の御遺文に直參し、広く他の分野の知識の学修につとめなければならぬ。

又、これは宗門の理想とする仏国土建設、娑婆即寂光の宗是であるが、現代語にするならば平和運動に外ならぬ。こゝに現代的熟語に統一する必要がある。立

正平和の運動とは別のものではない。宗祖からの悲願である。

吉本 前教

祖山中心を考え宗祖の遺徳を偲び、躍進する僧の結集は意義深い。多忙中各県より宗門代表の参加を得て、中部教研以上の教化活動状況を發表され、参考になつた事を感謝致します。

時間の関係上、自己紹介と各自活動状況を五分間での発言はよいと思つた。何かを学び僧自身の罪障消滅をして、信者には懺悔滅罪を説き、教化活動の実践經驗者であつた。

宗学としての考えは、大都市の場合可能であるが、田舎町では無理である。信者を一人でも多く募り檀家にする努力を決議した。

宗務所からの指名で押出された人もいたようである。お客様ではいけないと思う。

各分科会のまとめを現宗研で一活し、全国寺院へ配布願いたい。尚、現宗研で統一討議資料が作成したら、管内で教研会議を開ける余裕がほしい。「一発大砲あとはなし。」各管内で代表を選定したら、成果もより一層

向上すると思う。

春日 如誓

台風一過、中央教研第十二回身延大会の出来映えは、思ったより、いや、それ以上に立派な大会でした。

教師の道心ここに集まるといふ感を深くして感動いたしました。見方によっては、お祭りさわぎのご批判もあるかも知れませんが、僧侶教師が威儀を正して報恩法要のために結集した例は、これまで見聞いたことがありません。運営方針に沿って立派に果してきたように存じます。

私も辺境の地に住職しているので、出欠は常に迷うところ。その上、台風の狂暴さに思い、不安なま、留守を頼み出席したわけですので、意義深いものを感じました。

報恩法要は簡素なものでしたが、方便品・寿量品・神力品の三品を読誦し、唱題・回向と、木柩に合せて朗唱、非常に力強い儀風ではなかったかと、存じます。昔の法華懺法もこのようなものではなかったかと存じます。

次に自分の住職としての立場より背景をふりかえつ

て教団を考えると、宗門の分裂と対立、抗争、結果はバラ／＼である。教権をめぐる抗争、利権をめぐる抗争、ます／＼深まっていく歴史である。

伝道教団の内実の問題がます／＼重要になりました。宗門は伝道教団づくりに予算を大中に導入することです。

文書伝道に補助金を支給することです。たとえば、「みのぶ」「池上」「いっぽ」など伝道誌に対する援助です。このようにして宗門と伝道誌を結合し、教研会議がリーダーシップをとっていくことが必要です。文書伝道部会は成功するでしょう。

教学部会についても同様に教学的な面で連絡し合い、教学の振興を計ることで、その推進役は若い人が自分の問題として取り組むほかにありません。

硬直化しやすいものですから。

教学の研究史、研究状況なりをまとめることは、一年ないし二年に一回なりやっていくことは必要です。

その他の部会も同様でしょう。

おしゃべり分科会から、実行の分科会へ移りましよう。

今度の七百遠忌身延結集大会は、大変有意義な大会であった。感想、意見を左に記させていたゞく。

1、六分科会に分れて会議が進められたが参加者の希望の分科会に入れる様に願いたい。

2、無理かも知れませんが、遠方からの参加者の多く、軽食（ムスビ）低度でも昼食の用意の必要を願います。

3、討議資料集(1)が参加者の手元に配布され、よき発表者、助言者、運営、書記等に恵まれ会議がスムーズに運ばれた事、祖廟中心で、素絹五条の統一等がよかった。

4、地方に向って結集大会の発表の場を如何になされるかを拝聴したい。

要は如何なる討議よりも実行であるとの声が強かった事を付す。